

エコの概念で石黒先生と共鳴 「四万十の宿」の円滑な運営に導く



宇和島ステーション開発（株）代表取締役社長（元） 東矢 英二 氏

JR四国グループである宇和島ステーション開発の社長として、エコホテル「四万十の宿（事業主・JR四国）」と中村市（現・四万十市）が事業主となり建設した「四万十いやしの里」の運営を手がけた。四万十いやしの里の運営は、地方公共団体が設置した公共施設を、民間企業や団体を指定して管理・運営を委託する「指定管理者制度」に基づく。

「やらせていただきます」

「中村市には、かねてから『東洋医学の里』構想がありました。漢方の先生が中村市民病院にいらっしゃるのので、その先生を院長に東洋医学による医療施設をつくろうという構想です。そして、遠方からお客様を呼ぶためには、宿泊機能があった方がいいということになりました。ところが中村市には宿泊施設の建設・運営ノウハウがない。そこでJR四国に依頼があったと伺っています」

ホテル計画の経緯を、このように話す。

宿泊施設をJR四国で建設するとして、では運営をどうするか。この点についてはJR四国内部でも相当な議論があった。ボールの投げ合いで、手を挙げる者がなかなかいなかったという。そんな中で、宇和島駅に直結したホテルを経営していた同社に話があり、「宇和島と四万十は近い。『やらせていただきます』」と二つ返事で承諾した。その後、四万十いやしの里の運営も手掛けることになる。

「エコのコンセプトを形に」

ホテル開発に当たったのコンセプトは「エコロジーホテル」である。しかし、エコという概念はあっても、設計等にどう反映させていくかについては手探り状態だった。光明が見え始めたのは、JR四国の事業開発室長としてホテル計画の窓口だった八木英夫氏からペス建築環境設計の石黒代表を紹介されてからである。2つの施設の設計・コンサルティングを担当したペス建築環境設計、JR四国との3者による共同作業がスタートした。

「エコロジーホテルをつくりたいという私たちのさまざまな要望に対して、エコに関する設計の第一人者だった石黒先生は、具体的な提案をして設計に反映し、私たちがめざすエコなホテルの実現に導いてくれました」

具体的には、光を室内に導き風通しを良くする中庭の設置や太陽光が入る建物配置で電力消費を低減する提案などがある。また機械換気の電力消費を低減する風の道（ドラフト換気）、太陽光発電、太陽熱温水パネル、ペアガラス、外断熱なども導入した。